投稿

小学校の開校年をめぐって

手嶋宏治

もう三十年近くも前のことになりますが、昭和四十年代の後半から五十年代の初めにかけて、全国各地の小学校で、開校百年の機に『百周年記念誌』がつくられた時期がありました。

国では文部省が『学制百年史』（昭和七年）を刊行、大分県教育委員会も『大分県教育百年史』をまとめるため、既に乏しくなっていた明治初期の関係資料探しに奔走されていました。

別府市内の由緒の古い各小学校でも、百年誌編集が記念事業に採り上げられていましたが、その中でも草創期に複雑な経過を辿った朝日小学校の記念誌などは、諸般の資料を集めて、空白期の解明を試みられており、大変貴重なご労作であることが理解できます。

とりわけその中でも、沿革中の肝心な開校記念日（明治五年六月一日）のいわれの不明確な点が気がかりで、教育史や郷土史に見識をもっておられた執筆者が、論理と現実との折り合い探しに骨折られたように思われるからです。と申しますのも、旧来の私塾・寺子屋は無論のこと、藩校などもいったんことごとく廃止し、「学制」にのっとって改めて設立し直せと、学制領布と同時に明治五年八月三日付の文部省布達が出たので、それ以前に設立した学校は、存続しているはずがないからです。

では、それ以後明治五年のうちに、いち早く設立された学校はどのくらいあったのでしょうか。

県下の学校に関する統計で、現存する最も古いものに明治十一年末現在でまとめた「学事年報」（県公文書館蔵）があります。県から文部省に報告した控です。その表中に「開校年」の欄があり県下公学校（公立小学校五六八校、他二校）それぞれに記入されています。その中で明治五年開校という気の早い学校は一五校でした。

「学制」及び「布達第一三号」（共に明治五年八月三日付）に続いて、文部省は同年九月八日布達番外で「小学教則」を出しました。「学制」以前から県下に広めて

いた福沢方式の学校づくりで一安心していた大分県では明治六年一月、文部省から巡視に訪れた学制起草者の一人でもある長芡（ひかる）（三洲）からすみやかに学制にもとづく正規の学校につくり直すよう、また師範伝習所（教員養成校）を設立するよう促され、みこしを上げました。まず「小学仮教則」を明治六年九月に出し、週時間数や指導内容の基準を定めました。また現職教員を再教育するため、まず明治七年八月からの六〇日間を皮切りに、大分に設けた師範伝習所で次々に伝習（伝達講習）を行い、修了生を有資格教員として扱いました。

こうして伝習修了、教則通りの教育課程を実施している小学校を正則小学といい、従前の福沢諭吉の勧めによった方式の学校は変則小学といいました。がっちりした伝統のある学校では、正則小学への切り替えの年を開校年としたため、正則変則の記録がさだかでなく、とにかく学校としての設立年をとった学校よりも遅れて発足したかのような形になったものと思われます。

ところで現別府市域にそのころ存在した学校は、と目を通してみますと、関係校中には、明治五年開校の学校は見当たりません。

小学校名	所在地	開校年	生徒数 男	生徒数 女	教員数 男	教員数 女	首坐教員姓名
天間学校	天間村	明治九年	八	六	一		伊南民造
小坂〃	平道村	〃七年	三七	一〇	一		加藤累三
亀川〃	内竈村	〃七年	一〇五	一五	四		髙橋源治
鶴見〃	鶴見村	〃七年	一一三	二三	二		加藤新一
石垣〃	石垣村	〃八年	四七	七	二		矢野八百蔵
別府〃	別府村	〃七年	一九七	一一九	四		池田直恭
南立石〃	立石垣村	〃九年	三五	一八	一		髙屋清三郎
東山〃	東山村	〃十一年	三八	一七	一		薗田勝次郎
内成〃	内成村	〃七年	三六	一九	一		加藤常八

＊「立石垣村」とあるのは、「南立石村」の誤記、訂正漏れかと思われる。

（出典・『明治十一年分同十二年進達学事年報諸表』）

それでも鶴見学校など、準備の早く整ったところは明治七年、遅れたところでも同十一年には開校にこぎつけたことがわかります。表では九校になっていますが、そ

れは本校数であって校舎は小規模分散だった例がよくあり、鶴見学校も、ある時期には鶴見・鉄輪の二支校を抱えていた（朝日小学校沿革誌中の「支校開校届」明治八年十二月二十七日付）とみられています。また別府学校の場合は、別府村浜脇村両村共立学校として誕生したものの、明治十三年秋には、共立を解消分離し、浜脇村立校では浜脇学校の名を用いることになりました。両校の後身である南・北両小学校は、共有の開校年をもつことになったようです。

表では教員数一名の学校が珍しくありません。一人で全学年を担任するので、午前午後の二部授業にしたり、多くの級（現在の学年）の子どもらを複式授業で扱うなど、来客や雑務まで考えると、容易ではなかったはずです。でも新制度の学校とはいいながら、当時は私塾や寺子屋師匠の経験者が多く、困難を克服し、新進教師に道を譲るまでの間、学校の基礎固めをして下さったようです。

そうした方々の一人に、安政五年以来明治四年まで、松原学舎を開いていた津久井善平先生があり、別府学校から浜脇学校へと教員生活を続け、明治二十年末、七十二歳まで勤続されました。この間ほとんど無欠勤、熟練した指導で生徒の愛慕を集め、聴力健常、至ってカクシャクだと県下に紹介され、名物先生であったことが知られています。（『大分県教育雑誌』明治十九年七月号）

ところで、表の下欄に並んだ首坐教員は、現在の校長職に当たる方ですが、奇妙なことに加藤新一、池田直恭の両先生は、関係校の沿革誌中では首坐教員（歴代校長）の扱いを受けていません、どんな理由でそうなったのか、今となっては解明困難です。

ついでながら朝日小学校の場合、開校記念年月日のうち、月日について百周年記念誌では、校舎新築落成式の行われた明治三十七年の六月一日にちなみ、六月一日としたことを伝えています。この落成式には、県下巡視を兼ねて大久保利武県知事が親しく臨場し、その席上児童代表であいさつに出た矢田文吉・佐藤マツ両名に、家庭事情まで細かく尋ね、応答態度を激賞したことが大分県教育雑誌（明治三十七年六月号）にも掲載されていて、

栄えあるこの日を記念日にしたという事情もうなずける気がします。

こうしてみますと、開校年にしろ、その月日にしろ、本来行政上で定めたわけではなく、他と比較して論じても意味のうすいものであって、それぞれの学校にゆかりのある方々が、母校の健在を祝う心の拠りどころとして末永く生き続ければ十分なのではないでしょうか。

明治15年　新校舎落成時の郡長祝辞（朝日小学校）

沿革資料を常設展示してある「伝統のへや」（北小学校）